

# 産業能率大学

→ SANNO UNIVERSITY

## 2種類のPBLをはじめ、 学生に身につけさせる 能力を明確にした アクティブラーニング

単にアクティブラーニングを導入すればいいとする時代は過ぎ去った。とすると、どんな実践が求められるのか。その一つの答えが産業能率大学の教育に在る。大学教育再生加速プログラムに採択されたジェネリックスキル育成と可視化の取り組みだけでなく、2種類のPBLを組み合わせた教育など、進化し続ける同大学のアクティブラーニングへの取り組みを紹介する。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野伸一郎 撮影／広路和夫



### スーパーパティシエと連携し、 プロジェクト完遂を目指したPBL

「千葉県山武市だけで収穫される幻の苺“ふさのか”は大きくて甘く美味しいのですが、柔らかく、デリケートなため輸送できません。そこで私たちは、自由が丘の店舗でお客様に“ふさのか”と“とちおとめ”を使ったお菓子を食べ比べてもらい、現地に行って生の“ふさのか”を食べてみたいという気持ちを醸成します」

11月のある日、産業能率大学の「ブランド・プロデュース」の授業では、学生たちのプレゼンテーションが行われていた。

このプレゼンテーションに対して「お菓子は日持ちするもので、手を汚さずにさっと持ち帰れるものがいいね」と返しているのは辻口博啓氏。パティシエの世界大会にて数々の優勝経験があり、自由が丘の「モンサンクレー」をはじめとする多数のスイーツ店のオーナーパティシエであるとともに、産業能率大学の客員教授でもある。

この授業では、東日本大震災以降、苺狩りの観光客が減少した山武市と連

携し、学生たちが地域のブランド価値を発見し、それを発信することが課題となっている。

しかも、単なるビジネスアイデアコンテストではない。ここで出されたアイデアをさらに練り上げて1つの計画にまとめ上げ、12月21日と23日の両日、自由が丘に店舗をつくって、実際に学生たちのアイデアを受けて辻口氏が開発するスイーツの販売まで行うのである。

当然、そのためにはお菓子のテーマや店舗の内装、チラシやウェブサイトなどの宣伝、商品説明のための内容を自分たちで煮詰めていかなければならない。また、販売当日は全員が手分けして店長や販売スタッフ、金銭管理などの役割を担わなければならない。

### アイデアコンテストを超えて 企画を考え抜き マネジメント能力を高める

その狙いは何か。

「最近では多くの大学でビジネスアイデアコンテストが導入されていますが、きれいにまとめられた一発アイデアを競うプ

レゼン大会に終わってしまいがちです」と語るのは辻口氏とともに授業を担当する杉田一真准教授。「その限界を超えたかったのです」と言う。

この授業では、企画を徹底して考えぬくことが求められる。当然である。実際に山武市の苺を使ったスイーツを作り、販売までするのだから。

しかも、この実際の販売は辻口氏というプロフェッショナルの協力を得るだけでなく、自由が丘商店街の方々からの協力も得て実現される。その関係性までもマネジメントすることが学生たちには問



モンサンクレー・オーナーパティシエ 辻口博啓氏

われるのだ。そして、その核となるのが企画の質である。アイデアで終わらない、説得力のある企画こそが人を動かす。だから企画を練り上げることに授業の中で徹底的にこだわっているのである。

産業能率大学では、ビジネスアイデアコンテストを取り入れた1年次の「基礎ゼミ」も全員必修で行われているが、こちらにもアイデアの秀逸さを磨くことよりも、ジェネリックスキルの育成が教育目標とされている。

### 問題に依拠しつつ ロジカルシンキングと リーダーシップを磨くPBL

同じ日の午後、産業能率大学のラーニングcommonsでも一風変わった授業が行われていた。経営学部現代ビジネス学科ビジネスリーダーコースの2年生が履修する「ロジカルシンキング実践」の授業である。

この科目では権限がなくても発揮できるリーダーシップの育成が教育目標とし

て掲げられ、約100人が5人ずつに分かれてグループワークに取り組んでいる。担当するのは小林昭文教授と鈴木建生教授。小林教授はアクティブラーニングの伝道者として、鈴木教授は高校教育にコーチングを取り入れた実践で、高校の先生方にはよく知られた存在だ。

その日のテーマは「受験生にとって、魅力のある産業能率大学にするには」で、各グループでは熱心な議論が行われている。そのはずで、この科目の受講者のほとんどは前期に行われる「リーダーシップベーシック」で質問だけで問題の核心に迫り、その解決策や行動計画までを導き出す「質問会議」のトレーニングを受けているのである。

それでも議論が進んでいないグループもある。そうしたグループへは、クラス全体に8人配置されている上級生のチュードレントアシスタント(SA)が、さりげなく介入する。と言っても、意見やヒントを言っているわけではない。「どうして、うまく行っていないんだと思う?」。SAもまた質問で介入しているのである。



経営学部  
小林昭文教授



経営学部  
鈴木建生教授

議論の後は2グループが対になって、自分たちの考えをポスターセッションで発表している。

そして最後は、振り返り(リフレクション)にしっかりと時間がとられていた。

### 2種類のPBLの 性格の違いを踏まえた実践

課題解決型の高次のアクティブラーニングとしてはPBLがよく知られているが、Project Based LearningとProblem Based Learningでは若干ニュアンスが異なる。

前者がグループワークによりプロジェクトを完遂することを課題にしたアクティブラーニングであるのに対して、後者は問題に基づく課題解決型のアクティブラーニングである。産業能率大学で言えば、「ブランド・プロデュース」はまさにプロジェクト完遂型のアクティブラーニングであり、「ロジカルシンキング実践」は問題に基づくProblem Basedなアクティブラーニングである。こうした、性格の異なる2種類のPBLを計画的に組み合わせたカリキュラム設計を行っている大学は少ないのではないだろうか。



### 分析中心のPBLと企画を練り上げていくPBLでは鍛えられているところが違います。

経営学部現代ビジネス学科1年  
城岡来奈

この授業では、企画の重要性ということに気づかされました。最初は、グループワークで誰もアイデアが出せず沈黙が続いて、暗い雰囲気になってしまっていました。これではまずいと、次に全員が最低でも1つずつ情報収集してアイデアを出そうと決めたのですが、1人が自由が丘産のハチミツを使ってスイーツを作る「丘ばちプロジェクト」を活かそう、というアイデアを持ってきました。すると、自分たちでも驚くほどグループの雰囲気が一変しました。やはり企画を練るためには、その出発点となるアイデアが大事で、それを練っていくうちに、甘かったところや「これはできそう」という点が分かってきます。私は基礎ゼミでもPBLに取り組んでいる

のですが、そちらは3C分析やSWOT分析などを学びながら、それを活用して「横浜ベイホテル東急 ウェディング部門の事業戦略を考える」というテーマに取り組みました。分析中心のPBLと企画を練り上げて実行していくPBL。おなじPBLでも鍛えられているところが随分違うんだなあと感じています。



ブランド・  
プロデュース

## PROGテストによる ジェネリックスキル測定も導入

しかも同大学は、コラムで紹介するように、「アクティブラーニング」と「学修成果の可視化」を複合したプログラムで大学教育再生加速プログラムにも採択されている。ジェネリックスキルの育成を教育目標として定め、その育成のためのプログラムを実施するとともに、毎年、学生のジェネリックスキルの伸長の度合いをPROGテストで測定して学生の指導に活かすとともに、PDCAサイクルを回していく重要なCheckの環としているのである。

日本の大学のアクティブラーニングは進化しているか？ その問いへの一つの肯定的な答えが、産業能率大学の取り組みではないだろうか。



## SAは先生と一緒に授業を作ることで、自分の成長につながっています。

経営学部現代ビジネス学科3年  
マーケティング情報コース 藤田杏奈

スチューデントアシスタント(SA)をすることは何よりも自分自身の勉強になっていると感じます。自分が授業を受けている時と違って、SAの場合は自分の声のかけ方や質問の仕方によって学生の動きが変化することが分かります。自分自身の質問の仕方のレベルが上がってきていることも実感できます。また、同じSAでも基礎ゼミの場合とこの科目では学生の反応は違いますし、オリエンテーションキャンプでの反応も違います。それぞれに応じた関わり方を心がけています。SAは先生よりも学生にとっては近い存在ですが、重要なのは距離感だと思います。近すぎても遠すぎても駄目で、授業に友達がいてもサークルの後輩がいても、SAとしてソ-

シャルな関係を意識して関わるようになっています。また、この科目では先生とSAが授業の後、毎回一緒に振り返りをしています。「先生、さっきの説明は学生には通じていませんでしたよ」ということも対等に発言でき、次回の授業からすぐに取り入れてもらえるので、自分たちも先生と一緒に授業を作っている実感ががあります。



ロジカル  
シンキング

### Column①

#### 大学教育再生加速プログラムではアクティブラーニングと学修成果の可視化を複合。

**採** 択された産業能率大学のプログラムは①アクティブラーニングと②学修成果の可視化の両方にまたがる複合型である。アクティブラーニングについては今まで以上のプログラムの充実はもちろん、可動式の机のアクティブラーニング専用教室が新たに3つ増設される。またクリッカーの導入で、大教室の授業でも双方向的なアクティブラーニングが可能となる。さらに、そのアクティブラーニング中心の授業の学修成果を測定するためにPROGテストが1年から3年までの各学年に加えて卒業生にも実施される。PROGテストは、ジェネリックスキルを測定するために開発されたテストで、すでに全国で10万人以上が受験するほど急速に普及しているが、1年次のみが受験がほとんどであり、毎年受験する大学は極めて少ない。しかもこのテストは、学生のランク付けや成績評価のためではなく、学生が自分の能力を把握し大学がその能力をさらに伸ばすために活用されるとともに、プログラム改革にも活用される。



### Column②

#### 日本の私立大学で唯一、「7つの習慣®」を教材にしたビジネスリーダーシップ教育

**「7** つの習慣」とは、日本でも累計200万部の販売を記録する世界のベストセラービジネス書。この内容は世界147カ国でビジネスパーソン向け研修として事業展開され、世界の優良企業から支持を得ている。それを大学生向けにアレンジした授業が現代ビジネス学科のビジネスリーダーシップ教育として開始される。

「7つの習慣®」では、人の成長を「成長の連続体®」ととらえ、依存から相互依存へと成長する過程を7つにまとめている。「【第1の習慣】主体的である」「【第2の習慣】終わりを思い描くことから始める」「【第3の習慣】最優先事項を優先する」は、「私的成功」と呼ばれ、個人が自分のパフォーマンスを高める習慣について学び、「【第4の習慣】Win-Winを考える」「【第5の習慣】まず理解に徹し、そして理解される」「【第6の習慣】シナジーを創り出す」は、「公的成功」と呼ばれ、チームや組織で高いレベルに達するための考え方や方法について学ぶ。そして「【第7の習慣】刃を研ぐ」ではすべての習慣を磨くために、日々自分を磨く習慣を学ぶ。生活のあらゆるシーンで役立つ考え方が、日本の私立4年制大学では初めて正課の教育プログラムに取り入れられる。